

群読に適した教材

群読のために適した教材

群読は、一斉音読とは基本的に異なる読みです。内容と文体という観点から文脈を分析し、必然的に生まれる群によるコーラスと、個によるソロと、時にグループによるいわばアンサンブルとを織り交ぜて行う朗読です。したがって、必然的にソロとアンサンブルとコーラスとを生み出す作品（教材）でなければなりません。

そのために、まず、音声化に堪えうる作品を見極めなければなりません。現代および近代文学には、音声化には向かない作品もあります。さらに群読となると、そしてまた、子どもによる群読となると、教材にする作品は厳選する必要があります。

群読のために適した教材とはどのようなものなのでしょうか。一言で言えば、読み分ちと読み担いの条件のすべてを網羅する文章ということになります。しかし、そのような文章は、現実にはあり得ません。また、ある条件を欠いた文章でも十分に群読に適しているという文章もあります。

読み分ちと読み担いの条件

- (1) 文体に音声化するに適したリズムやうねりのあるもの

群読への導入に際しては、明白なリズムやうねりがあるものがよい。

- (2) 複数の人物が登場するもの

群衆の登場するものはなおよい。また、複数の人物が同一の主語となり、その言動が同一の述語となって同時的に描かれているものはなおよい。

- (3) 作品の語り手の視点が移り動くもの

視点の対象の移動や視点となる人物や位置の移動の状況がはっきりととらえられるもの。

- (4) 内容が思想的であるよりは、叙情的であるもの。さらには、叙事的であるもの

簡素な表現であり、リズムのある叙事詩が適している。

- (5) 表現が説明的であるよりは、描写的であるもの

ただし、群読に適した教材が、この5つの条件を満足するものである必要はありません。この中で、多くの性格を備えているものが選ばれるということになります。個々の学級の群読に適した作品（文章）とは、その学級を担当する教師が探し出し、それが結果的に適合したとき最もよい教材となります。

また、ある作品（文章）が群読に適しているかどうかを子どもたち自身が判定することも、群読の学習が進んだ段階では可能になります。子どもたちがそうした鑑識眼を備えること、文章を識別する目を養うことも、群読の大切な学習目標となります。

群読に適した作品（中学校）例

- (1) 群読への導入

「かっぱ」谷川俊太郎 「夕日がせなかをおしてくる」阪田寛夫 「河童と蛙」草野心平
「那須与一（扇の的）」『平家物語』より

- (2) 対の読み

「かぼちゃのつるが」原田直友 「山の歓喜」河井醉茗 「朝のリレー」谷川俊太郎

- (3) 群の読み

「勝手なコーラス」草野心平 「生きる」谷川俊太郎 「コレガ人間ナノデス」原民喜

- (4) 祈りと主張の読み

「われは草なり」高見順 「永遠のみどり」原民喜 「生ましめんかな」栗原貞子

- (5) 古典の群読

「那須与一（扇の的）」『平家物語』より 「春はあけぼの」清少納言『枕草子』より
「平泉」松尾芭蕉『奥の細道』より